

「患者の心の痛みを分かって下さい」

フィリピンプロジェクトのセミナーで14歳の患者ベテルさんが訴える

「結核は6ヶ月間、薬を飲み続ければ治ります。だからと言って機械的に薬を渡さないでください。私の心は傷ついているのです。この深い痛みを分かってほしいのです」

平成22年2月22日、23日の2日間、マニラで、結核予防会フィリピンプロジェクト主催の「結核セミナー」が開催されました。このプロジェクトは、結核予防会がフィリピンで最も遅れているマニラの都市貧困層の結核対策の強化のため、シール募金の益金と外務省、現地日本大使館の協力¹⁾で行っているものです。対象地域は、マニラ市トンド地区、ケソン市パヤタス地区で、セミナーには各市の保健所や、民間(NGO)医療機関で働く医師や看護師などの医療関係者約60名が集まり、これまでの成果や課題を話し合いました。結核予防会の現地事務所のポブレテ医師をはじめ7名のスタッフが総出でお世話をし、日本からは、結核研究所石川所長、大角医師、市原職員、紺職員、本部より飯田財務部長も参加しました。

当事者の視点を語ってもらう

今年のワークショップでは、行政スタッフやヘルスワーカーなどのサービス提供者だけでなく、結核患者やその家族、結核治療を支えるボランティアなどにも参加してもらい当事者の視点で経験を語ってもらいました。結核対策に関わる医療関係者が集まるなか、カノッサというNGO団体での治療経験を話してくれたのが、ベテルさんでした。彼女はトンド地区²⁾に住むまだ14歳の少女です。彼女はこれまでとても元気で、学校に通い、友達も沢山いて、楽しく明るい生活を送っていました。しかし結核に罹って生活は一変、学校も行けず、友人も近寄ってくれず、生活の希望を失いました。そんな絶望の淵から救ってくれたのは、(診療で通っていた)カノッサのシスターやボランティアでした。

「今あるものを失いたいと願う人は、誰一人としていないと思います。もし、それが一瞬にして無くなったらどうでしょう。結核で私の自由、友人、幸せ、全てが無くなりました。希望を失いました。多くの友人は感染を恐れて、私から距離を置き、離れていきました。どうやってこの運命を受け入れればよいのでしょうか？ これは罰なののでしょうか？ なぜ神様はこの病気を与えたのでしょうか？」

結核治療パートナーとして彼女の治療を支えたボランティアのピダさんも元結核患者です。彼女によれば、「ベテルさんの両親は共働きのため、彼女はひとりで、テレビもラジオもない部屋で一日中イスに座って過ごしていました。家庭を訪問し、初めて彼女に会った時、とても寂しそうでした。ボランティアとして治療を支援していくなかで、自分の娘のように接し、親しくなりました。」

ベテルさんはふつうならそれで終わるはずの6ヶ月の服薬治療後の検査の結果、喀痰にまだ結核菌が出ていることが分かり、引き続き治療が必要になりました。

「治療がうまくいかず、さらに治療の継続が必要だと私の口からは言えませんでした。そこで、彼女をカノッサに連れて行きました。カノッサでは、シスター、ボランティア、そして他の患者さんと一緒ですから、一人だと寂しく感じることはありません。これまで数多くの患者さんの助けをしてきましたが、彼女のような状況に出会ったことはありません。ですから、毎日彼女に会い、気分はどうか、必要なものはないか、治療について不安はないかを確認しました」

ベテルさんの治療を支えたのは、カノッサで感じる暖かい雰囲気と、治療を支援するシスターやボランティアでした。ピダさんも元患者として治療のつらさを自ら体験しているので、患者さんの心の痛みに共感できたのです。ピダさんはいまカノッサで小児の結核の治療を担当しています。

最後に、ベテルさんの一言を紹介します。

「この心の痛みは、結核よりもつらいものでした。本当に必要なのは、結核の薬ではなく、私のような患者への理解や思いやりです」

(文責 国際部 紺 麻美)

1) 外務省NGO連携無償資金協力

2) 以前スモーキーマウンテンと呼ばれるごみ山があったマニラ市の貧困地域